

岐阜市街大地震の図（189年濃尾地震）

189年（明治24年）10月28日午前6時38分50秒（日本被害地震総覧）岐阜県本巣郡根尾谷（現本巣市根尾）を震源として、歴史上最大級の内陸直下地震、濃尾地震（マグニチュード8.0）が発生した。この地震により震度7の強い揺れに見舞われた地域は、兵庫県南部地震（マグニチュード7.3）と比べ遥かに広域であり、温見断層・根尾谷断層・梅原断層にそって線状に続くと共に、地盤が軟弱な尾張西部地域に面的に広がった。濃尾地震は、明治の近代化以降、我が国が経験した初めての大地震であり、その被害は、死者7,273人、全壊家屋142,17戸にも及んだ。主たる被災地が、岐阜県美濃地方と愛知県尾張地方であったこともあり、「美濃尾張（身の終わり）地震」とも呼ばれた。

口絵の錦絵は、岐阜市の被災の様子を描いたものであり、地震の翌月、東京市日本橋区馬喰町の沢久治郎によって売り出された。錦絵は当時の重要な情報伝達手法の一つであり、書き手の感じ方を通して当時の社会の捉え方が凝縮されている。

濃尾地震が発生した時期は、岐阜市が市制を開始し東海道線が開通した2年後にあたる。明治になって20年ちょっと、近代化への道筋が整ったところでの大地震だった。

この地震での岐阜市内の揺れは震度6～7、市内の人的被害は、人口28,731人に対し死亡245人、建物被害は、総戸数6,346戸に対し全壊969戸、全焼2,325戸であった。市内の建物の過半が失われたことになる。

錦絵上部に記されている解説には、「先ず家が倒れ、家人は家から出ることができず、その後、延焼火災により生きながらに焼け死んだ」と記されている。これは、兵庫県南部地震で見たあの残酷な光景そのものである。

この錦絵には、当時の都市震災の特徴があまねく描写されている。絵上部には、開通間もない東海道線が描かれている。鉄道線の盛土が崩れ、鉄

橋が落橋している。図には、木曾川と記されているが、長良川を渡る長良川鉄橋と思われる。ちなみに、この絵では、木曾川の向こうに、鉄橋の左に伊吹山、右に名古屋が描かれているが、これは実際とは異なる。

錦絵左のレンガ色の建物には、ステーションと記されており、開業間もない東海道線の岐阜駅と思われる。当時はレンガ造ではなかったらしいが、ここでは、レンガが落ち、建物が傾いている。さらに、中央右には警察署が、右端には県庁がある。いずれも代表的西洋建築であるが、傾いている。

また、右方では工場の煙突が根元から折れ、中央ではガス燈や電信柱が傾き、電線が垂れ下がっている。このように、近代化の象徴である鉄道、西洋建築、ガス燈、電気などの被害が克明に描かれている。

一方、日本古来の木造家屋や土蔵の被害も多数描かれている。木造家屋の多くは倒壊し、人々が下敷きになっている。また、土蔵の多くは、形は残っているが壁が落ちている。木造家屋の周辺では火災が発生し延焼が進んでいる。

こういった被害の特徴は、この震災に対して社会が感じた印象を表しているのだろうと思われる。

なお、この地震では各地で地震波形が取得されるなど、地震学的に大きな貢献をした。また、当時の岐阜測候所長・井口龍太郎は、3条の震烈波動線が生じたと指摘した。西側の波動線は、養老断層が形成した盆地単部の地中崖状地形による波動のエッジ効果とも解釈され、兵庫県南部地震で話題となった「震災の帯」の形成とも通じる。

また、レンガ造建築の被害は、西洋建築の安易な導入に反省を促すと共に耐震建築の重要性を喚起した。震災後に設置された震災予防調査会は、その後の我が国の地震学・耐震工学研究の礎を作った。

福和 伸夫（名古屋大学大学院環境学研究科 教授）



岐阜市街大地震の図(岐阜県立図書館蔵)

坂東樂立圖書館蔵書

波早 大地震圖

鉅蔵書

今の治世四年十月廿八日 晚天
午前六時二十分の地震ハ別
テ波草の七層大揺れ引
刺烈なる揺震 予震初
まけしく揺さげ家倒
札死人何人

